



# 教会短信

2012年8月5日

No. 46

牧師 間瀬 善彦

猛暑の夏、福島原発の事故から学び、電力の見直し、原発をどうするかを、お互い問いながら、猛暑という現実の試練を乗り切ってまいりましょう。

神はわたしたちにあえて試練を与えられる、というのが聖書の考え方です。それはわたしたちの成長を願う神の御心から出たことです。わたしたちはその試練に正面から誠実に取り組むのでしょうか。それとも悲観的に災難として片付けてしまうのでしょうか。

創世記に登場するアブラハムという人物は、ある時、神にモリヤの地に息子イサクを連れて行って、焼き尽くす<sup>ささげ</sup>献げ物としてささげなさい、と命じられます。当時、神を礼拝するとき、動物が献げ物としてささげられました。神はアブラハムに動物ではなく、「あなたの愛する独り子イサク」を献げ物としてささげなさいと言われたのです。聖書の神は残酷だ、と思われるかもしれませんが、これは神の<sup>こころ</sup>試みでした。神は御自分の命令に、アブラハムがどう従うかを<sup>ため</sup>試されたのです。

アブラハムは躊躇することなく、次の朝早く、ろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を用意し、息子イサクと共に、神の命じられた所に向かいました。3日目に目的地に着くと、さっそくアブラハムは祭壇を築き、薪を並べて、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せました。そしてアブラハムは、刃物を取り、今まさに息子イサクに刃を向けようとしていました。

その時、神の声がしました。「その子に手を下すな。あなたが神を<sup>おそ</sup>畏れる者であることが、今、わかった。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」。アブラハムが目を凝らして、振り返ると、息子イサクの代わりに一匹の雄羊が用意されていました。アブラハムは息子の代わりに、この雄羊を献げ物としてささげました。

イサクの代わりにささげられたこの雄羊もまたかわいそうだと思うられるかもしれませんが、実は、「自分の独り子である息子すら、惜しまなかった」のは、神様なのです。この雄羊とは、神の独り子、イエス・キリストのことなのです。わたしたちの罪の身代わりに十字架について死んでくださったイエス・キリストの救いを指し示しています。

神はわたしたちにあえて試練を与られます。しかし、「試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道」(コリント第一 10:13)をも備えてくださるお方なのです。わたしたちも神を信頼して、試練に遭っても、前向きに希望を持って歩んでまいりましょう。

## 二つのライフスタイル



神のなされることは皆その時にかなって美しい 伝道の書 3・11

当時 78 才の私は足立区の一戸建ての古い家に独りで住んでいました。夕方になると北千住の「マルイ」や「ルミネ」を歩きまわり、気に入った衣服や本を買いました。夜 9 時頃に家に帰り、夜中にその本を読み、朝の 5 時頃に眠り、午後 3 時頃に目を覚まし、また北千住へ遊びに行くという昼夜逆転した生活をしていました。

「老年とは価値の再検討の時期であり、つかの間の価値から永続的な価値への —中略— 漸進的な移行期なのです」(ポール・トゥルニエ 『人生の四季』 p141 に述べています)。

努力して得た社会的地位は退職と同時に失いました。今、思うとそれは「つかの間の価値」でした。

そのうち私は病気になって入院しました。二か月ほどたった頃、主治医や親族が家に戻ればまた病気になると心配するので、人に頼んで不用品を処分していただきました。2 階を埋め尽くした衣類や 1 階にうず高く積まれた本に囲まれた自由なライフスタイルでした。この先高齢になればこのような生活はできなくなります。

退院後、私が通っている教会から徒歩 1 分という場所に、4 月にオープンした老人ホームに入居しました。私は「永続的価値」とは何だろうと考えました。「死」はすべての終わりではないので、いつお迎えが来てもいいように神様とよい関係にある生き方をすることだと思います。

ホームの入居者の年齢は 80 才以上の方が多いです。皆さん人生の終わりがやがて来ることを知っています。でも大部分の方々は満ちたりた平和なお顔をしています。ここには生存競争はありません。野心を持っている方はいません。私を除いて大部分の方は何ともいえない気品があります。

私はこれまでの自分勝手な生き方を神様にお詫びしました。今しばらく単独外出が禁止されているので日常生活は少し不便ですが、神様が私の最後の居場所を用意してくださったことを感謝しています。

# 聖書の言葉で磨かれた人たち

## 賀川豊彦

「スラムの聖者」として世界的な名声も

社会事業家 1888～1960年

大正から昭和にかけて、キリスト教精神に基づいて貧困層の救済に乗り出した人物。神学校に通いながら、神戸のスラム街に住み、安くて栄養のある料理を提供するなど実践的な活動を行いました。その後、奨学金でアメリカのプリンストン神学校に留学。この時、米国で目にした労働組合運動が貧困を解決する手段と考え、労働組合運動や、農民運動、生活協同組合運動などを積極的に推進。今日の形態へと発展する礎をつくりました。

スラムでの活動体験をもとに書いた小説『死線を越えて』は大ベストセラーになり、書名が流行語になったといえます。現在の価値で十億円もの印税収入があり、その多くは社会運動のために投入されました。

1923年に関東大震災が起きると、すぐに救援物資を自ら集め、神戸から船で向かい、被災三日後には横浜に上陸。瓦礫の中を歩いて東京に行き罹災者救援を行いました。

その活動は「スラムの聖者」として世界的にも知られ、訪欧時には各国の主要大学の学長や大統領などとも会談するほどでした。

参考資料・林啓介著『賀川豊彦』（賀川豊彦記念・鳴門友愛会）

（『聖書の品格』いのちのことば社より引用）

**★特別伝道集会のご案内** 10月14日（日）10:30—12:00

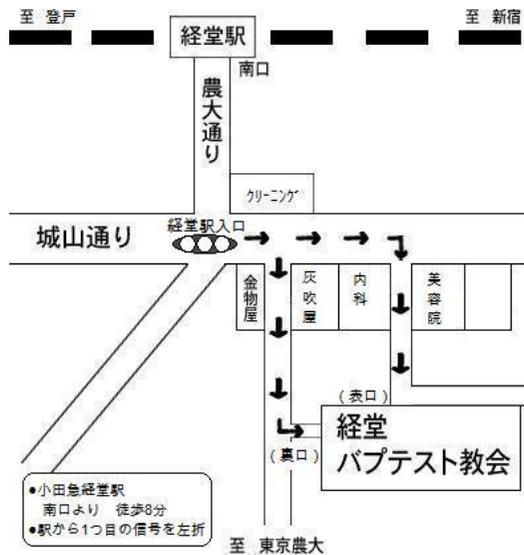
講師 松村 誠一先生（西川口教会協力牧師）

**★困ったことや悩み事がある方は、いつでも教会へ相談にいらしてください。**

『教会短信』への質問でもかまいません。事前にお電話いただければ幸いです。

## 日曜日は教会へ集会案内

主日礼拝	日曜日	午前10時30分～11時30分
教会学校	日曜日	午前11時45分～12時30分
	青年科・成人科	
聖書を学ぶ会	火曜日	午後 1時30分～ 2時30分
聖書研究・祈祷会	水曜日	午後 7時30分～ 8時30分



## 経堂バプテスト教会

牧師 間瀬 善彦

〒156-0053 世田谷区桜1-64-30

TEL 03-3427-2352

※当教会はプロテスタント教会です。エホバの証人、モルモン教、統一協会などとは異なります。